

## 「フミヅキタケ」(3年)

キノコの名称(和名)は、およそその特徴や形状を言い当てたものが多く、名前を聞いただけで、だいたい姿が想像したくなるようなものが結構あります。例えばこんな具合です。

「ハリガネオチバタケ」(針金落葉茸)；針金のように細い茎(実は茎ではない)のキノコが落ち葉から発生する。(落葉の裏面に胞子を蔓延させ、そこから子実体を形成する。)

「ササクレヒトヨタケ」(ささくれ一夜茸)；茎に「ささくれ」のような突起が多数あり、傘の部分は一晚(一夜)でインクのように溶けて、胞子を流し出す。

「タマハジキタケ」(玉弾茸)；胞子の入った直径数ミリ玉を、弾き出して遠くに飛ばす。

そんな興味深いキノコの名前の一つに、「フミヅキタケ」というのがあります。漢字では「文月茸」。つまり7月(恐らく旧暦7月でしょう)に見られるキノコという意味です。平野部ではどちらかといえば春(5月頃)のキノコなのですが、ブナやモミ(あるいはその混生林)の林床を好むので、高原に多く見られます。富士山麓や浅間高原では実際に文月(7月)に見られます。

昨日、3年生児童を連れて、埼玉県の鶴ヶ島市に「農業体験」に行ってきました。農家16軒に受け入れをお願いし、5~8人の班で農作業(草抜きや収穫)を体験させたのです。(日帰りなのに、林間学校なみに大変な準備をしてくれた若い同僚と、受け入れ下さった方々に感謝です。)



典型的な鶴ヶ島市の農家。

奥に薪や炭焼き用の雑木林があり、「新田集落」の面影を色濃く残しています。

鶴ヶ島市の農家は、小規模多種栽培が多く、子どもたちはジャガイモ、トウモロコシ、キュウリ、トウモロコシ、タマネギ、ブルーベリーなどの収穫を体験し、それぞれおみやげまでもらって、非常に豊かな体験学習でした。



カブトムシやチョウの幼虫を見つけた子も多かったのですが、中にはキノコをとってきた子もいて、ポリ袋に入ったキノコを見せてくれました。農家の人は「サケツバタケ」（裂鏢茸）と言ったそうですが、正体は「フミヅキタケ」でした。同定（動植物や鉱物の鑑定）は誤っていましたが、私は「サケツバタケ」というキノコを、農家の方が知っていたことに感服しました。確かに時期や特徴は似ています。私は萎えないうちに、「文月茸」を絵に描いておきました。

フミヅキタケ（オキナタケ科）  
*Agrocybe praecox*  
Tsurugashima / Saitama Pref.  
2014,-6,20 C.Tanaka